



# 京大広報

No. 700

2014.5



京都大学、百賢教育基金会および百賢亜洲研究院が「Asian Future Leaders Scholarship Program」の実施協定を調印  
—関連記事 本文4164、4165ページ—

## 目次

『京大広報』700号発行にあたって 総長 松本 紘……………4162	〈随想〉 総長時代の思い出 名誉教授 沢田 敏男……………4168
〈大学の動き〉 名誉教授称号授与式を举行……………4163 退職者功労表彰式を举行……………4163 京都大学 ASEAN 拠点キックオフシンポジウム —東南アジア研究・教育・連携の新展開—を 開催……………4164 京都大学、百賢教育基金会および百賢亜洲研究 院が「Asian Future Leaders Scholarship Program」の実施協定を調印……………4164 本学と和歌山県教育委員会との連携に関する 協定を締結……………4165 本学と奈良県との教育分野の連携に関する協定 を締結……………4166	〈洛書〉 二つの旗 田中 求……………4169 〈話題〉 「ジョン万プログラム」による図書系職員の海外 調査研修を実施……………4170 人文科学研究所 第9回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催……………4170 化学研究所国際シンポジウム2014(ICRIS'14)を 開催……………4171 宇治おうばくプラザで「第5回たそがれ花見 コンサート」を開催……………4172
〈寸言〉 人の輪、チーム・レフェリー 遊磨 正秀……………4167	〈計報〉……………4172 〈特集〉「京大ウィークス2013」Vol. 6 ……4173

## 『京大広報』700号発行にあたって

総長 松本 紘

『京大広報』は昭和44年5月20日の創刊以来、本学の構成員に対し、大学の動きを速やかに周知するため、500号までは月2号、以降は月1号(8月を除く)発行してまいりました。このたび、本号が700号となりました。

700号までに、各界で活躍する本学卒業生による「寸言」は130名に、本学名誉教授による「随想」は537名、本学現任教員による「洛書」は287名にご寄稿いただきました。

600号以降、平成18年9月号(615号)から、理事・副学長、監事、新設の部局長による巻頭言を掲載してきたことや平成22年1月号(652号)から、「公開講座」、「お知らせ」、「日誌」の項目をなくし、公開講座やシンポジウム等については、開催報告の掲載を充実させたことが大きな変更点となります。また、巻末記事として、平成18年12月号(618号)まで「編集後記」を掲載しておりましたが、それにかえて平成19年1月号(619号)から21年12月号(651号)まで「隔地施設紹介」をシリーズで掲載、引き続き平成22年2月号(653号)から23年3月号(665号)まで「グローバルCOE紹介」をシリーズで掲載、平成25年12月号(695号)以降は「京大ウィークス2013」をシリーズで掲載中です。

定期刊行以外には卒業式、入学式の号外の他、臨時号外を発行してきました。600号以降では、本部構内百万遍門改善計画・幹線道路整備計画について(平成17年5月)、事務改革について(平成17年11月)、平成18年4月1日本部事務組織再編について(平成18年4月)、益川敏英名誉教授ノーベル物理学賞受賞(平成20年10月)、事務改革の取組について(平成24年4月)、山中伸弥教授ノーベル生理学・医学賞受賞(平成24年10月)、山中伸弥教授ノーベル生理学・医学賞授賞式(平成25年1月)を発行しております。

発行部数は、定期刊行と号外ともに11,500部でしたが、平成23年度業務改善提案コンクールの優秀提



案である「京大広報」の教職員一律配布の見直しによる配布部数の削減により、平成24年度から定期刊行分4,000部へ印刷部数を減らしました。その後、時計台等での配架必要部数の増加を考慮し、平成25年12月

号(695号)からは定期刊行分を5,000部へ若干増やしました。一方で、平成22年12月号(662号)より始めております京都大学ホームページでのWEB掲載を学内に案内し、あらたに学外からも広くご覧いただけるようになっていきます。

編集体制としては、かつては広報委員会が編集・発行にあたっていましたが、600号を迎えた平成17年4月以降は総務部広報課が、平成24年4月より渉外部広報・社会連携推進室が編集・発行の任にあっています。

法人化後、国立大学法人を巡る状況は大きく変化してきました。本学に対しても熾烈なグローバル競争の波に打ち勝ち、地球社会を先導できるリーダー人材の輩出を強く要請されるようになってきました。それにこたえるべく、伝統を基礎とし、革新と創造の魅力・活力・実力ある京都大学の実現に向けて、国際高等教育院や大学院総合生存学館(思修館)の設置、白眉プロジェクト、ジョン万プロジェクトなどの独自の取り組みを鋭意行ってきたところです。

最後になりましたが、700号を迎えるにあたり、これまで『京大広報』の発行にご協力くださった関係者各位に篤くお礼申し上げます。社会の変化が加速化している現在、今までに増して広報の必要性が高まっています。必要なところに必要な情報を機動的に伝達しうる『京大広報』であるために、今後ともご助力賜りますよう本学の構成員の皆様切にお願い申し上げます。

## 大学の動き

### 名誉教授称号授与式を挙げる

4月4日(金)午前11時から、総長応接室において、江崎信芳理事・副学長、川添信介文学研究科長、宮川 恒農学研究科長および石崎宏明総務部長の出席のもとに名誉教授称号授与式が挙行され、松本 紘総長から当日出席の伊藤邦武元教授(文学研究科)、末原達郎元教授(農学研究科)に称号が授与された。

総長より称号を授与された方は次の7名である。



名誉教授称号授与式後の懇談の様子  
(左側2人目より、末原元教授、伊藤元教授)

氏名	推薦部局
高田 時雄	人文科学研究所
遠藤 隆	農学研究科
伊藤 邦武	文学研究科
奥乃 博	情報学研究科
角野 善宏	教育学研究科
八尾 健	エネルギー科学研究科
末原 達郎	農学研究科

(総務部)

### 退職者功労表彰式を挙げる

退職者功労表彰式が3月31日(月)に本部棟5階大会議室において挙行され、松本 紘総長、江崎信芳理事・副学長、石崎宏明総務部長、被表彰者23名が出席した。

退職者功労表彰式は、退職時において勤続年数が30年以上の教職員ならびに有期雇用教職員に対し、その永年にわたる功労を讃えるため、昨年度から創設されたもので、平成25年度末の被表彰者は42名であった。

表彰式では出席の被表彰者の氏名を紹介した後、松本総長より、代表者に対して表彰状が授与され、祝辞が述べられた。祝辞では、本学に対して永年一人ひとりが尽力されて大学の名誉が築かれてきたこと、今後は各々が育てて来た後輩たちに引き継がれ

ていくことに触れ、感謝の言葉が述べられた。

祝辞の後は、松本総長、江崎理事・副学長および石崎総務部長との記念撮影を行う等、各々交流を深め、和やかな雰囲気の中で式が終了した。



松本総長による挨拶

(総務部)

## 京都大学 ASEAN 拠点キックオフシンポジウムー東南アジア研究・教育・連携の新展開ーを開催

京都大学は、国際戦略「2x by 2020」の理念を踏まえて、ASEAN地域における研究、教育、国際貢献活動を支援し、アジアにおける「京都大学のプレゼンス向上」に貢献することを目的に、平成26年6月28日(土)に、タイ王国バンコク市内に「京都大学ASEAN拠点」を設置する。

本拠点設置に先立ち、ASEAN地域で積極的に展開してきた本学各部局の研究教育活動の情報を共有し、学内協力体制の構築を目指し、平成26年3月17日(月)に稲盛財団記念館にて「京都大学ASEAN拠点キックオフシンポジウムー東南アジア研究・教育・連携の新展開ー」を開催した。本シンポジウムには学内外から合計87名の参加があり、大盛況であった。

シンポジウム開会式では、松本 紘総長の挨拶に始まり、戸田隆夫独立行政法人国際協力機構(JICA)人間開発部部長、松本裕樹日本貿易振興機構(JETRO)大阪本部部长から祝辞が述べられた。松本総長は「学問は真実をめぐる人間関係である」との考えから、本拠点設置を契機に本学が長年培ってき

たASEAN地域との「縁」や、同地域で活躍される本学教職員の「縁」の結びつきが強くなることに対する期待の言葉を述べた。

続いて、田中耕司学術研究支援室長より、本シンポジウムの趣旨説明が行われた後に、白石 隆政策研究大学院大学長による「東南アジアの政治経済」と題した基調講演が行われた。その後、ASEAN地域に海外拠点を設置している部局のうち、11部局から活動紹介やASEAN拠点に対する期待や貢献についての発表があった。

ディスカッションでは、木原正博医学研究科教授・国際担当理事補の司会で、ASEAN拠点に対する期待と、学内からの貢献についての活発な意見交換が行われた。閉会式では、三嶋理晃国際担当理事・副学長が閉会の辞を述べた。

シンポジウム終了後には懇親会を開催し、ASEAN拠点設置に向けて、参加者間の「縁」の結びつきを強くする大変良い機会となった。



ディスカッションの様子

(研究国際部)

## 京都大学、百賢教育基金会および百賢亜洲研究院が「Asian Future Leaders Scholarship Program」の実施協定を調印

本学は香港在住の実業家で国際的に活躍されている曹其鏞(Ronald K. Y. Chao)永新企業有限公司副会長により創設された百賢教育基金会が実施する留

学生向け奨学金プログラム「Asian Future Leaders Scholarship Program」に参加することに合意し、3月21日(金・祝)に香港で実施協定を締結した。



奨学金プログラムについての意見交換を行う関係者

この奨学金プログラムは、アジア太平洋地域内の海外留学を望むアジアの若者たちの異文化間理解と青年交流の促進を図ることを目的として創設された。同プログラムでは重点大学(Anchor Universities)として、日本側から本学、早稲田大学、一橋大学が、また中国側からは本学の大学間学術・学生交流協定校である香港科技大学、北京大学、浙江大学が選ばれている。

同プログラムの実施協定締結にともない、百賢教育基金会の支援のもと、平成26年10月より、中国の指定8大学を卒業し、本学大学院修士課程または博士課程に進学する、年間最大15名の学生に対して、

一人当たり奨学金年額約250万円を、最長2年間にわたり支給することになった。

また、同プログラム奨学生には、Ronna Chao氏がCEOを務める百賢亜洲研究院が主催する4週間のサマープログラムに参加することが義務付けられている。

なお、学位を取得した奨学生に対しては「Bai Xian Asian Fellow」の称号が附与される。

今後、同プログラムによって本学大学院に進学する中国からの優秀な学生が増えることになり、在籍する日本人学生等をはじめ世界各国の外国人留学生との相互理解と一層の交流が促進することが大いに期待される。

香港での調印式は、本学から松本 紘総長、小寺秀俊渉外担当理事・副学長他関係者、香港側から曹副会長、ChaoCEO他関係者が永新企業有限公司に一堂に会し、和やかな雰囲気の中で執り行われた。



調印式にて、左から松本総長、曹副会長、ChaoCEO

(研究国際部)

## 本学と和歌山県教育委員会との連携に関する協定を締結

本学と和歌山県教育委員会との連携協定および覚書に関する締結式を3月25日(火)に、百周年時計台記念館2階迎賓室にて挙行了。

和歌山県教育委員会とは平成23年3月に、本学教育学研究科が連携協定を締結し、和歌山県の教育の充実・発展と教育学研究科の研究・教育の推進をめざし、教員の派遣、研究協議、本学への研修ツアー等を通じて、高校生に多様な学びの機会を提供してきた。こうした取り組みをもとに、高大接続を強めていく視点も盛り込みながら、幅広く高大連携事業を展開するために、本学と和歌山県教育委員会とで協議を重ねた結果、これまでの取り組みからさらに一歩進めた本協定および覚書の締結に至った。

この協定では、大学および高等学校における教育

の課題に関し、連携して教育および研究の充実、発展に資することを目的としている。また、覚書では、本協定に基づき本学の教育および研究活動の理解を深め、和歌山県教育委員会が定めた連携指定校と教育の充実発展のための具体的な取り組みを始めることとしている。平成26年度の和歌山県連携指定校は橋本、那賀、向陽、桐蔭、海南、耐久、日高、田辺、新宮の9校となっている。

協定式には、本学からは、松本 紘総長、淡路敏之教育担当理事・副学長、前平泰志教育学研究科長、中村佳正理事補、森脇 淳理事補、高見 茂 理事補、惣脇 宏総長主席学事補佐、中村 務株式会社生物環境システム工学研究所代表取締役研究所長が出席し、和歌山県教育委員会からは、西下博通教育

長、田村光穂学校指導課長が出席された。松本総長、西下教育長が協定書および覚書に署名した後、固い握手を交わし、今後の協力について確認した。

今後の具体的な取り組みについては、本学と和歌山県教育委員会とで相談・検討のうえ、決定する予定である。

なお、教育委員会との連携協力に関する締結は、大阪府教育委員会、滋賀県教育委員会、兵庫県教育委員会、京都府教育委員会、京都市教育委員会に続き6件目となる。



連携協定締結式に出席した、前列左から、田村学校指導課長、西下教育長、松本総長、淡路理事・副学長、中村所長、後列左から、惣脇総長主席学事補佐、中村理事補、前平研究科長、森脇理事補、高見理事補

(学務部)

## 本学と奈良県との教育分野の連携に関する協定を締結

本学と奈良県との教育分野の連携に関する協定および覚書に関する締結式を4月1日(火)に、本部棟5階特別会議室にて挙行了した。

本学では、奈良県の高等学校から個別に依頼のあった大学見学や模擬授業の要望に、積極的に協力してきたが、さらに幅広く高大連携事業を展開するために、本学と奈良県とで協議を重ねた結果、教育分野の連携に関する協定の調印に至った。

この協定では、大学および高等学校における教育の課題に関し、連携して教育および研究の充実、発展に資することを目的としている。また、覚書では、本協定に基づき本学の教育および研究活動の理解を深め、奈良県が定めた連携校と教育の充実発展のための具体的な取り組みを始めることとしている。このことにより、私立高校等も含まれることとなった。平成26年度の奈良県の連携校は、奈良女子大学附属

(国立1校)、帝塚山、東大寺学園、奈良学園、天理、智辯学園、智辯学園奈良カレッジ、西大和学園、奈良学園登美ヶ丘、聖心学園(私立9校)、奈良、平城、高田、郡山、畝傍、青翔(県立6校)、一条(市立1校)の計17校となっている。

協定式には、本学からは、松本 紘総長、淡路敏之教育担当理事・副学長、中村佳正理事補、森脇淳理事補、高見 茂理事補が出席し、奈良県からは、荒井正吾知事、野村正樹地域振興部長、吉田育弘教育長が出席された。

松本総長、荒井知事が協定書および覚書に署名した後、固い握手を交わし、今後の協力について確認した。また、連携校の先生方も出席された。

今後の具体的な取り組みについては、本学と奈良県とで相談・検討のうえ、決定する予定である。



連携協定締結式に出席した本学、奈良県、連携校関係者

(学務部)

## 寸言

## 人の輪，チーム・レフェリー

遊磨 正秀

平成26年2月、私はロシア・ソチのオリンピックパークにいた。冬季オリンピック大会でのショートトラックスピードスケート競技の審判としての参加だった。この競技は、1周111mほどの氷上コースを集団でぐるぐる回って順位を競うものである。国際スケート連盟から同競技女子の第1アシスタント・レフェリーの指名を受けたのは昨年8月だった。

京都大学在籍の頃、スピードスケート部の一員として、当時西部構内にあったクラブのボックスでたむろしていた。氷上練習は、当時岡崎と高野にあったスケートリンクで行っていた。大学院に進んで現役を引退した後、現役時代にお世話になった競技会等のお手伝いをし始めたのが、役員としての道への契機となった。

どんな競技にも、多くの役員がいて大会が成り立つ。この競技においても、レフェリー、スターター、コンペチターズ・スチュワード(組合せと記録作成担当)といった主要審判に加え、タイム測定、順位判定、周回数表示、リンクへの選手の出入り補助、コース上のマーカーブロックの位置を修正し、氷の状態を保つ係、判定用ビデオ撮影担当、アナウンサー、組合せ表やレース結果を印刷配布する係、そして救急医療担当など、競技会を遂行するには多数のスタッフが必要である。必要に応じて役員の食事や交通、宿泊の手配も必要である。いわば大会の裏方であるが、とりわけレフェリーの役務は重要である。通常4人いるレフェリーのうち、チーフはすべての責任を負うことになる。レース中の違反行為はむろん、氷の状態、タイムスケジュールの管理、大会にかかわるさまざまな設備、選手の装具もチェックし、チームリーダーやメディアとの打ち合わせをし、各役員の適性をも判断する。アシスタント・レ



フェリーはそれらを補佐する。

それにしてもどうしてオリンピックパークにいたのだろう、とわが身を振り返っていた。学部・大学院時代に在籍していたのは理学部・理学研究科の動物生態学研究室である。大学院時代は、京都市西部の清滝川でゲンジボタルの暮らしぶりを追っていた。スケート界とはかけ離れた分野である。その後、当時の川那部浩哉教授が率いていたアフリカ・タンガニーカ湖での魚類調査に参加した。さらに後のマラウイ湖やバイカル湖での共同研究も含め、海外でのこれらの経験が大きかった。研究対象が昆虫から魚類へ、場所が河川から湖へ、日本からアフリカやシベリアへと広がったことはもちろんだが、私にとって大きかったのは、読み書き中心だった英語から会話できる英語が使えるようになったことだった。さらに重要な経験は、調査はチームであり、日本人のみならず、現地ザイール(当時)などの人々との輪の重要性が身に染みたことであった。つまり、研究に関する討議だけでなく、普段からのつきあいから生まれる相互の信頼性が大事だと感じ始めたのであった。

ショートトラックスピードスケート競技のレフェリーは先に述べたようにさまざまである。選手団や観客にとっての最大の関心事は、競技中に何かトラブルがあったときにレフェリーがどういう裁定をするのか、であろう。それについては、3人のアシスタント・レフェリーの意見を聞いた上でチーフ・レフェリーが裁定する。このとき、レフェリー陣の間の阿吽の呼吸のようなものがある。互いの信頼関係があつてこそ、チーフも安心して最終決断できる。それ以外のさまざまな問題についても、けっしてチーフ・レフェリーの独壇場ではなく、それこそチーム・レフェリーなのである。大会期間中、食事を一緒にする。散歩にでかけるときも一緒。国境を越え、文化を越え、本職の枠を越え、こういったボランティア仲間がいる。毎年の国際審判講習会で再会する仲間の笑顔がなにより楽しみだ。

(ゆうま まさひで 龍谷大学理工学部教授、昭和59年理学研究科博士課程修了)

## 随想

## 総長時代の思い出

名誉教授 沢田 敏男

京大広報が1969年創刊以来、この5月で700号を迎えたことを慶祝申し上げます。この有意義な誌上に随想を掲載できることは望外の喜びである。私が第20代の総長に就任した時代(1979~85)は、大学紛争の末期で学内は荒廃状態にあった。ノーベル化学賞を授与(1981)された福井謙一教授のように立派な先生方もおられたが全体的にみて、それまで続いていた大学紛争で研究・教育が10年ほど停滞していたと思う。これに対処しなければならぬと考え、主に二つのことに取り組むことにした。第一は、当然のことながら学術研究の振興であり、もう一つは、カレッジスポーツなど学生の内発的活動の奨励である。勿論、いずれも容易にできることではなく時間もかかるし予算を伴うことであった。まず、学術振興には国際交流が必要かつ重要と考え、その具体策として、①外国の大学との交流協定の締結、②国際交流会館の建設、③国際交流基金の創設等と取り組み、尽力した結果、ウイスクンシン大学をはじめ、ベルリン自由、パリ第七、北京、西安、慶北、カセサート、クイーンズランド等の大学と協定を結ぶことができた。また、文部省や京都市の支援を得て、修学院地区に国際交流会館(宿泊室133室、延べ面積6,800㎡、鉄筋コンクリート5階建)を建設(1982)した。さらに国際交流基金の創設のために10億円を目標に募金を行うことにしたが、この募金事業を達成するため当時(1983~85)、関西財界で活躍されていた磯田一郎住友銀行頭取と樋口廣太郎副頭取(後、アサヒビール社長)に格段の支援をいただいたお陰で全国の産業界や同窓会等からの協力を得て目標額を越える浄財を醸出願うことができた。なお、この基金は、その後、京大創立百周年記念事業として行われた募金等と合わせ増額され、またその管理運用を公益財団法人京都大学教育研究



振興財団が展開し現在に至っている。上述の国際交流基金の創設は、当時、総長として大学の正常化、活性化への取り組みの総仕上げという聊か自負して<sup>いささ</sup>尽力したことであり、忘れることのできぬ有難い思い出である。なお、学術振興に関連したことで、附属図書館の改築(1983)や文学部博物館(総合博物館)の増改築(1986)ができたこと、ならびに学外における取り組みとして、我が国とドイツ連邦共和国との文化学術交流を目的とした“Japanisch - Deutsches Zentrum Berlin”の開設(1985)および日本学術振興会の海外連絡オフィスや特別研究員制度の創設、充実に参画・関与したことは貴重な経験であった。

第二の取り組みであるカレッジスポーツの奨励ということは、いつの時代においても重要な課題であり学生の体力・気力の錬成に努めることが重要視される。当時、京大の体育会は40余の部やクラブを擁し、輝かしい歴史・伝統を築き活動していたが、更なる振興のため、新入学生の入部の奨励や各運動部等の施設環境の整備に努めた。その成果として北白川、吉田、宇治の各グラウンド施設の修理、総合体育館の改修整備、馬術部会館、厩舎や北白川スポーツ会館の新築等の実現をみた。このような環境整備が、その後の七大学体育大会における総合優勝や柔道部、馬術部の連続優勝、ヨット部、カヌー部の大学日本一、アメリカンフットボール部の全国制覇等の快挙<sup>いささ</sup>に聊かなりともつながったのではなかろうかと思う。とりわけ印象深い思い出は、水野彌一監督率いるアメリカンフットボール部が1983年の甲子園ボウルで日本大学に勝利して、大学日本一になり、さらに翌年の正月、国立競技場でのライスボウルで実業団覇者のレナウンを下して、全国制覇を成し遂げたという快挙であり、大学を挙げて歓喜し、感動をもたらしたことであった。

以上、思い出の散文を連ねたが、おわりに当り、在任中、ご助力ご協力いただいた部局長会議の先生方はじめ関係各位に対し深甚なる謝意を表しつつ<sup>かく</sup>擲筆する。

(さわだ としお 昭和60年退職 現日本学士院会員 元総長、専門は農業農村工学)



## 洛書

## 二つの旗

田中 求



平成10年に工学研究科分子工学専攻で学位を取得してから、15年以上の月日をドイツで過ごしてきました。ミュンヘン工科大学物理学部において博士研究員として研究者としてのスタートを切り、独立グループを率いながら物理学で上級学位(ハビリタチオン)を平成17年に取得しました。その直後に、ハイデルベルク大学において化学・物理学の正教授として着任し、生命物理化学の講座を担当してきました。平成25年4月からは、日独6大学交流協定(HeKKSaGOn Alliance)との連携で、ドイツに軸足を置きながら物質-細胞統合システム拠点(WPI iCeMS)においても研究を行っています。幸いすばらしい仲間やスタッフにも恵まれ、「京都でしかできない、自分ならではの研究をしたい」という意気込みのもと、楽しい研究生活を送っています。

ふと振り返ってみるに、ドイツ語も堪能とは言いかねる35歳になるかならないかの日本人が、ドイツで最も古い伝統を誇る大学(1386年設立)に正教授として着任し、講座を担当するという事は、(学間に国境なし、という建前はともかくとして)私にとってもハイデルベルク大学にとっても大きなチャレンジであったと思います。これまでドイツで積んできた研究者としてのキャリアの中で直面したいろいろな試練を乗り越えてこられたのは、若年の頃、私にさまざまな試練とチャンスを与え、温かくも厳しく育ててくれた、ミュンヘン時代の恩師Erich Sackmann先生の薫陶に負うところが非常に大きいと、深く感謝しています。

ドイツのアカデミアにあってマイノリティとして生きる中には、「素敵なことや人」以上に「素敵でないことや人」にも、あらゆるレベルで遭遇します。目に見える困難や障壁だけでなく、ちょっとしたつまづき、ほんの少しの悪意でも、がっかりしたり、くじけそうになることはあります。アカデミアというのは、(こういってはいけないのかもしれませんが

が)変わった人の標本箱のようなものですし、どこにいても出る杭は打たれるものです。「なぜここ(ドイツ)にいるのか」、「ここでしかできないことがあるのか」と自分に問う毎日です。

このような環境にあることは、自分がなぜ自然科学の研究を志すのか、自分の研究者としての「指紋(アイデンティティ)」は何かを、自らに問いかける習慣を否応なくつけてくれたように思います。日本人が非常に少ない環境において、日本人であることを深く意識し、それに恥じないように、という思いは当然あります。しかしそのような一般論を超えて、自分の中に強く息づいていると感じたのは、「学問の主流を追いかけることなく、あくまで独自性を重んじた研究を行う」という、京都大学の学風でした。この、あえて主流に乗らないという独立の精神と、基礎から説き起こし、対象に直線的に切り込む、ドイツで身につけた骨太な研究スタイルが、研究者としての今の自分の背骨を成していると思います。この「二つの旗」は決して軽いものではありませんが、これを高く掲げて、顔を高く上げ、できれば笑顔で、この道をまっすぐ走っていく決意です。この思いを体現する場として京都に帰ってくる機会を得たことに深く感謝すると共に、この機会を活かして、京都で出会う学生や若手研究者の中から、この旗を共に掲げる仲間を増やしていきたいと思っています。

今年度、日独の学術交流に貢献した研究者にドイツ連邦政府大統領とフンボルト財団から授与されるジーボルト賞をいただくこととなりました。受賞にあたり、末筆とはなりましたが、私を若年の頃から応援して下さった、吉川研一、太田隆夫両名誉教授(理学研究科)と木村俊作教授(工学研究科)、名誉ある賞に推薦して下さった杉山 弘教授(理学研究科)、そして拠点へ招聘して下さった中辻憲夫物質-細胞統合システム拠点設立拠点長・教授、北川 進同拠点長・教授と、支えてくれる拠点スタッフ、そして「きつつい」ポストと共に走り続けてくれる、日独の「求研究室」のみんなに、この場をお借りして心からの感謝をささげたいと思います。

(たなか もとむ 物質-細胞統合システム拠点教授 専門は生命物理学、アクティブマターの物理学)

## 話題

## 「ジョン万プログラム」による図書系職員の海外調査研修を実施

図書館機構では、2月27日(木)に附属図書館で「ジョン万プログラム」による図書系職員の海外調査研修報告会を行い、全学から31名の教職員が参加した。

平成25年度は同プログラムにより、附属図書館事務部情報管理課雑誌情報掛主任の坂本 拓氏、同情報サービス課参考調査掛員の梶谷春佳氏、医学研究科事務部教務・学生支援室(図書掛)員の八木澤ちひろ氏の3名をイギリスとドイツに15日間にわたり派遣した。3名は、イギリスではオックスフォード大学、英国情報システム合同委員会他の5機関、ドイツではゲッティンゲン大学、ドイツ医学中央図書館他の4機関を訪問し、論文投稿料(Article Processing Charge: APC)、医学ジャーナルとオープンアクセス、大学図書館におけるモバイル端末向けサービスを中心に、欧州における最新の動向を調査し、多くの知見を持ち帰った。

報告会では、持ち帰った成果の報告にとどまらず、同プログラムの目的でもあるその知見を、今後

大学や業務にどう反映するか提案を含めた報告があり、質疑応答も含め、参加者にとってもテーマに関する最新の知識を取得し議論する良い機会となった。

なお、本研修の成果報告書は、同プログラムホームページ内に掲載されている。

<http://www.john-man.rp.kyoto-u.ac.jp/index.html>



オックスフォード大学Radcliffe Science Libraryにて  
(Angela Carritt 利用者教育コーディネータ(左端)らと)

(附属図書館)

## 人文科学研究所 第9回 TOKYO 漢籍 SEMINAR を開催

人文科学研究所では、3月17日(月)、東京の学術総合センター一橋講堂において、第9回TOKYO漢籍SEMINARを開催した。

本セミナーの目的は、人文科学研究所が80年余にわたって蓄積してきた中国学研究の成果をわかりやすく紹介し、多くの人々に漢籍、ひいては漢字文化全般に関心を深めてもらおうとするものである。

本セミナーは富谷 至同研究所附属東アジア人文情報学研究センター長の開会挨拶に始まり、「木簡と中国古代」をテーマに、富谷教授による「中国西北出土木簡概説」、目黒杏子研究員による「年中行事における官と民」、土口史記助教による「木札が行政文書となる時」の講演を行った。講演終了後のパネルディスカッションでは、参加者からの熱心な質問や議論が交わされた。「実際の木簡文書を見ながらそ

の内容について解説を受ける機会はあまりない。どの講演もわかりやすくよく理解できた。次回も楽しみにしています」などの感想があり、参加した160名のほとんどが、10時30分から16時まで聴講した。



セミナーの様子

(人文科学研究所)

## 化学研究所国際シンポジウム2014(ICRIS'14)を開催

化学研究所国際シンポジウム(Institute for Chemical Research International Symposium, ICRIS)は、当研究所の創立70周年(平成8年)を機会に立案され、以降、化学の様々な先進的研究分野をターゲットに比較的小規模の国際会議として実施されてきた。今回は、若手研究者の国際交流促進と新分野開拓の二つの視点で、本学の全学経費による支援を受け、また、エネルギー理工学研究所、生存圏研究所、化学研究所共同利用・共同研究拠点の共催にて、3月10日(月)から3日間にわたり宇治おうばくプラザで開催した。「スマートマテリアルの科学と技術」をテーマに、Bio-inspired Systems, Green Innovation, Advanced Analysis and Designの三つを主要トピックスとして掲げ、ノーベル化学賞受賞者の鈴木 章北海道大学名誉教授の特別講演、各トピックスを総括する4件の基調講演、国内外からの17件の招待講演に加えて、91件のポスター発表が行われた。

総勢381名の参加者を得て、化学をキーワードに、生物、材料、精密解析を包含し、当該テーマに関する、質的にも高度な議論が展開されるなど、有意義なシンポジウムとなった。また、1日目のポスター発表とこれに続くワインパーティー、2日目のバンケットは、参加者相互の親睦を深めるよい機会となり、バンケットでは、山本 正宇治市長、江崎信芳

企画担当理事・副学長、Andrew Woolleyトロント大学教授、鈴木名誉教授の各先生より挨拶があり、今後のさらなる交流に対する化学研究所への期待も寄せられた。

学術分野の先進性に伴い、研究者コミュニティが企画する国際シンポジウムのテーマがますます先鋭化する中、本シンポジウムは、学際融合を目指して、幅の広い、「化研らしい」研究交流となった。何よりも、予想を大幅に上回る多数の参加者を得たことは、この分野への関心の高さと連携研究の重要性を如実に感じられる機会となった。本シンポジウムを成功に導いた要因の一つに、これまで化学研究所が共同利用・共同研究拠点として行ってきた共同研究の実績が挙げられる。一般発表としてはポスター発表を募集し、主題関連の共同研究参画者にも周知を図った結果、50件あまりの申込みがあり、視点を替えれば拠点の革新機能材料創製に関わる共同研究成果報告会ともみなしうる大きな盛り上がりにつながった。「生物を規範としたスマートマテリアル創製」は、化学研究所の向後の重点課題の一つとして位置づけている。

化学研究所にとって、研究アクティビティーの発信とさらなる進展を促す大いに意義のあるシンポジウムとなり、今後の融合的共同研究への発展が期待される。



ICRIS'14集合写真(招待講演者を中心に)

(化学研究所)

## 宇治おうばくプラザで「第5回たそがれ花見コンサート」を開催

宇治地区では、4月4日(金)午後6時より、宇治おうばくプラザきはだホールにおいて、Flying Mallets、宇治黄檗学園吹奏楽部による「第5回たそがれ花見コンサート」を開催した。

このコンサートは、おうばくプラザの広報と地域貢献の一環として毎年春に開催しているもので、今回は山本 正宇治市長も来場され、挨拶をいただいた。



会場の様子

Flying Malletsの演奏は、誰もが知っているおなじみの曲を楽しくアレンジしたもので、曲の間に珍しい打楽器の紹介なども交え、親しみやすく、迫力のある演奏であった。後半には参加者も手拍子で演奏に参加し、一体となって楽しんだ。

宇治黄檗学園吹奏楽部の演奏も好評で、参加者からは、地域の春の恒例行事として今後も継続を期待する声が多くあった。



Flying Malletsの演奏

(宇治地区事務局)

## 訃報

このたび、島<sup>しま</sup> 通保<sup>みちやす</sup>名誉教授が逝去されました。ここに謹んで哀悼の意を表します。以下に同氏の略歴、業績等を紹介いたします。

### 島 通保 名誉教授



島 通保先生は、平成26年3月27日逝去された。享年86。

先生は昭和28年3月京都大学理学部地球物理学科を卒業され、同大学院に進学、同32年6月に京都大学理学部の助手になられた。昭和36年12月に

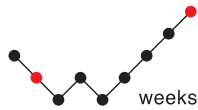
防災研究所の助手に併任となり、同38年4月に同研究所の地震動部門の助教授に昇任され、同46年6月に地すべり部門に移られた。昭和47年4月に教授に昇任され、徳島地すべり観測所の所長を併任された。

先生の研究分野は幅広く、地震学、火山物理学、地すべり学という学問で、防災科学・減災科学という分野のエキスパートであった。研究初期には阿蘇火山の噴火の様式を解明された。地震動部門では、

孔中地震計を用いた各種の検層や、加振器を用いた検層や、地震動の理論波形の生成等の理論と観測の両方で地盤の振動現象を解明された。地すべり部門に移られてからは、地すべりの前駆現象と移動機構の理論的な解析に多大な成果をあげられた。

一方教育面では、多くの人材と研究者を育成されたことは言うまでもなく、地すべり災害が多く発生している国の学生の教育に多大の尽力をされた。学外においては、地すべり学会において運営委員として学術面や実際面において多大な貢献をなされるとともに、地すべり学会関西支部の設立にも尽力された。また、各種の委員会で委員を歴任され、国民を災害から守ることに尽力された。

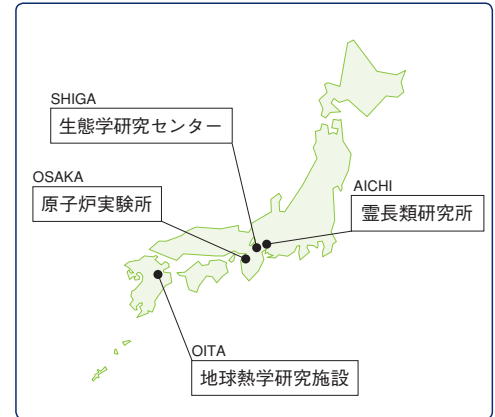
(防災研究所)



# 京大ウィークス2013 Vol.6

「京大ウィークス」は、京都大学が日本全国各地に数多く所有する、多様な隔地施設の活動を学内外に紹介することを目的に、従来からそれぞれの施設で行ってきた公開イベントを、毎年秋の一定期間に集中して行う企画である。今年度は、21の施設が参加して10月12日(土)から11月9日(土)までの期間で実施した。

今号では、生態学研究センターの「生態学研究センター 一般公開：学校で習わない生き物の不思議」、霊長類研究所の「霊長類研究所 第23回市民公開日」、原子炉実験所の「原子炉実験所 アトムサイエンスフェア実験教室・講演会」および理学研究科の「地球熱学研究施設 建物(登録有形文化財)ライトアップ」を紹介する。



## 生態学研究センター 一般公開：学校で習わない生き物の不思議

生態学研究センター(CER)(滋賀県大津市)において、11月2日(土)に一般公開「学校で習わない生き物の不思議」を開催した。

今回のイベントでは、生き物の暮らし方、生態系や環境問題などに関心を持たれる方々に、教科書に載っていない面白い課題をわかりやすく紹介する講演2題「びわ湖がつなぐ生き物と文化の多様性」、「南極でのこを探そう」を行った後、自由参加で「CERの森・自然観察会」を行った。当日は天気にも恵まれ、自然観察会の参加者は、センター施設内の森を担当教員の植物に関する説明を聞きながらのんびりと散策した。

今回は遠方からの熱心な参加者もあり、定員を超える61名の参加があった。小学生の参加者も多く、みな積極的に質問等を行っていた。



CERの森の見学風景



講義風景

## 霊長類研究所 第23回市民公開日

霊長類研究所(愛知県犬山市)において、10月27日(日)に第23回市民公開日を開催した。

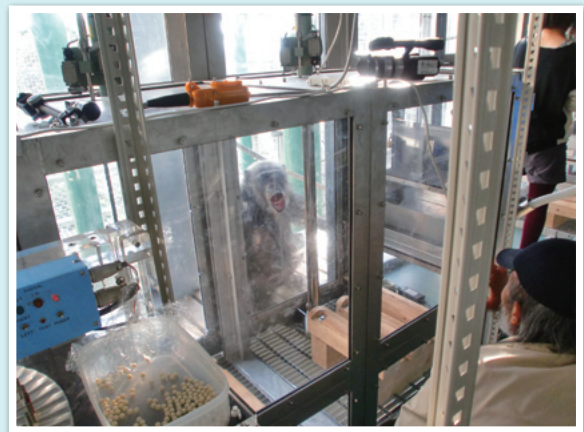
今回のイベントでは、最新の研究成果についての講演のほか、チンパンジーやニホンザルの放飼場、展示資料室など、研究所内の施設の見学を行った。

当日は、10代から70代まで、合計51名の幅広い年齢層の参加があった。また、今回の参加者の特色として、「京大ウィークス2013」に参加したことで広報範囲が広がったことにより、近隣市町村や研究所周辺だけでなく、関東や九州など遠方からの参加も多く見られた。

参加者からは講演や見学時に数多くの質問が積極的に寄せられ、終了後には「チンパンジーの勉強風景を見られてとても良かった」、「これからも研究の発展に努力してほしい」などの感想が寄せられた。



平井啓久所長挨拶と研究所の紹介



勉強部屋でチンパンジーと触れ合う参加者ら



松沢哲郎教授による、チンパンジー放飼場屋上での説明



講演の様子

## 原子炉実験所 アトムサイエンスフェア実験教室・講演会

原子炉実験所(大阪府泉南郡熊取町)において、10月20日(日)にアトムサイエンスフェア実験教室、10月26日(土)に講演会を開催した。

このイベントは、地域との共生を目指し、周辺住民を対象に、子供たちには科学の面白さを、成人には実験所の研究施設と研究活動を少しでも理解してもらうことを目的に毎年開催しているものである。

10月20日(日)に開催した実験教室では、より多くの科学実験を体験してもらうことを主体とし、「放射線で飛行機雲を作ろう!」、「シャカシャカライトを作ろう!」と題した二つの実験コーナーと体験コーナー「蛍の光は蛍光じゃない?!(化学発光と蛍光のちがい)」、「蛍光ビーズでストラップ作り」、「エアロバイクで発電体験」、「低温は冷たいだけじゃない?!」、「音を見てみよう」を設け、41名の参加があった。

いずれのコーナーでも、子供たちは真剣に実験等に取り組み、驚きの体験に歓声を上げ、質問が飛びかった。参加した子どもたちからは、「面白かった」、「また来たい」、「分かりやすかった」などの声が寄せられた。

10月26日(土)に開催した講演会では、鈴木 実教授による「難治性がんへの挑戦 ―ホウ素中性子捕捉療法―」、大井川宏之日本原子力研究開発機構研究推進室長による「加速器駆動システムの開発 ―放射性廃棄物の負担軽減に向けて―」の二つの講演を行った。

近年関心の高いテーマを取り上げたこともあって、前年より多い60名の参加があり、参加者からは、「参考になった、定期的に行ってほしい」、「素人にも良く理解できた」などの声が寄せられた。



「エアロバイクで発電体験」の様子



「蛍の光は蛍光じゃない?!」の様子



「放射線で飛行機雲を作ろう!」の様子



「低温は冷たいだけじゃない?!」の様子

## 地球熱学研究施設 建物(登録有形文化財)ライトアップ

理学研究科附属地球熱学研究施設(大分県別府市)では、10月26日(土)と11月2日(土)の両日、国の登録有形文化財に指定されている建物をライトアップし、併せて建物入口玄関・階段周りの見学、パネルによる施設沿革・建物や研究内容の紹介、および岩石・水試料展示による研究の紹介を行った。

両日とも天候に恵まれ、LED照明により美しく浮かび上がったレンガ造りの建物が人々の目を引きつけた。

施設の紹介には40名の参加があり、参加者からは「同じ県内にこのような歴史ある建物があることを知り、感動しました。来年は、研究の内容についても、もっと理解出来ればと思います」、「ライトアップはおごそかな感じでとてもステキでした。地震などの情報もたくさんあって、おもしろかったです」、「いつも何の建物だろうと外観ばかり気になっていたのですが、今回の催しで中身(研究されている内容や研究されている方々)のことがよくわかり、建物がより身近に感じられました」などの声が寄せられた。



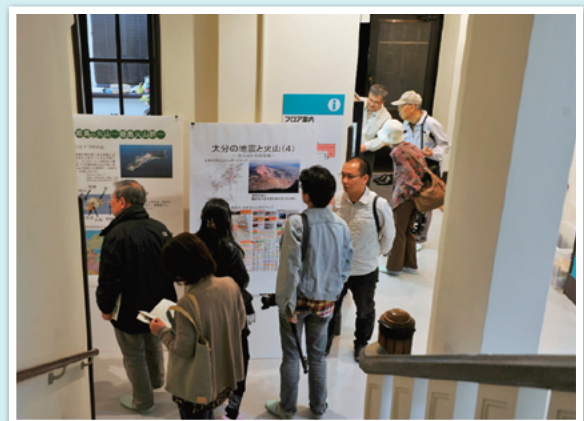
京大ウィークス入り口



玄関の展示ケース



ライトアップされた本館建物



建物内を見学する参加者